https://rodosoken.com/

ベヴァリッジ・プランへの深澤さんのスタンスが示される。そこでは、ベヴァリッジ・プランが、性別役割分担を前提にしていたとしても、無業の妻へのアンペイドの家事労働を認める視点が含まれていたことへの注目が披露される。第1部の2つの章では、1970年代からの福祉国家のジェンダー分析を追い、1990年代のフェミニストの比較福祉国家研究の開始と進展・類型化を取りあげる。フェミニストは、福祉国家を単に「国家の家父長制」として批判するだけでなく、「人間解放の潜在力」が存在していることを示したとし、このことの承認が、ジェンダー関係の変革と福祉国家の変革の関連におけるフェミニストの姿勢の理解に不可欠であるとされる。

続いて、ジェンダー平等政策を、女性労働政策分野と社会保障分野に分けて展開される。

第2部の2つの章は、女性労働政策とジェンダー平等政策を扱い、国連やILOの新しいジェンダー関係構築のための動向・戦略が述べられ、M字型就労サイクル脱却という視点から見た比較福祉国家研究が展開される。第3部の2つの章では、社会保障制度におけるジェンダー関係の変革とILOの政策、高齢者ケアワークの社会評価の多様化と新しいジェンダー関係の構築を介護給付を例に論じる。

深澤さんと今お話しできるのなら、「福祉国家の人間解放潜在力」と社会主義国家のそれとの関係、M字型就労サイクル脱却という表現のもつ妥当性やジェンダー統計の扱い、ジェンダー平等政策の持つ光と影について議論してみたいが最早かなわない。深澤さんの研究への姿勢と、病魔との一刻をあらそう戦いの中での執筆を思うと胸が痛む。本書からは、優先順位に配慮して、世に問うべきことは早くやりなさいという私たちへのメッセージも伝わってくるようだ。

(東信堂、2003年9月刊・2800円)

(いとう　せつ・理事・昭和女子大学教授)

遠州　尋美著

『グローバル時代をどう生きるか
ー自立コミュニティが未来をひらく』

浜岡政好

本書は「地域政策」の教科書として執筆されたものである。このように紹介すると、地域または地方自治体におけるあれこれの政策の紹介や政策のつくりかたが取り上げられている書物と誤解されるかもしれない。しかし、本書ではいくつかの地域における事例は取り上げられてはいるが、個別の「地域政策」を論じることに焦点が当てられているわけではない。本書の真骨頂は、グローバル化のなかでの地域の再生の道筋を、実に説得的に示していることにある。

地域社会が今日直面している困難の性質を、産業革命、フォード主義の成立に続く、三度目の大転換(「グローバル・ウエッブ蓄積様式」)のなかに位置づけたうえで、グローバル化の大波に押し流されない地域づくりのために、地域政策の重点をどこに置くべきかが呈示されている。それは一言でいえば、「社会的生産基盤の再構築」である。ここで著者が「社会的生産基盤」と呼んでいるのは、中小零細企業を含めた地域の産業集積や「人々が安心して住み続けられる優れた住環境、福祉・医療・教育環境」などである。

この生産基盤に著者があえて「社会的」と冠しているのは、地域のもつ歴史や文化、そして人々の関係性などをも射程にいれて広く「生産」の基盤を捉えようとしているからだと思われる。そのことは本書の中心に据えられている「社会的生産基盤の再構築」の事例分析(阪神淡路大震災における真野地区、「一人一芸」の岩手県大野村、文化と景観づくりの長野県小布施町、墨田区の3M運動)からもうかがうことができる。

このように本書が多国籍企業に主導された「労働力・資源収奪型直接投資競争」に対抗するものとして力説しているのは「コミュニティの自立」であるが、これはけっして偏狭な反グローバリズムの薦めではない。それぞれのコミュニティが自立を図りながら、それらが地球規模でのパートナーシップをつくりあげて、拡大する格差と貧困の克服をめざそう

https://rodosoken.com/

というものである。この自立したコミュニティ同士を結びつけるグローバルな経済原則として、筆者は「フェアトレード原則」の確立を説いている。

以上が評者が取り出した本書のエッセンスである。平易な語りかけ方といい、丁寧な事例の示し方といい、本書が良質のテキストであることは疑いない。そして単に地域政策という領域の入門書というだけでなく、現代日本経済論、現代日本社会論の入門書としても優れたものである。本書の内容が読むものにリアルに迫ってくるのは、筆者の非常に手堅い実証的研究（日本だけでなくアジアやアメリカなど）に裏付けられているからであろう。巻末に示された膨大な調査研究の報告書などがそれを示している。

ところで小泉「構造改革」によって推進されている現実の地域政策は、筆者が呈示する方向とは逆の方向に進みつつある。地域の社会的生産基盤の崩壊がいっそう加速されようとしている。この流れを反転させるには、まだそれほど多くない成功事例を増やし、またその成功の意味を多くの人びとの確信にする活動を広げる必要がある。そのためにはまず日本社会のなかに「社会的生産基盤の再構築」のパートナーシップを形成できないものであろうか。本書が、そうしたパートナーシップの形成の接着剤になることを期待したい。

（法律文化社、2003年４月刊・2500円）

（はまおか　まさよし・常任理事・佛教大学教授）

原富　悟著

『トミさんの社会保障談義』

公文　昭夫

とにかくタイトルがいい。「トミさんの社会保障談義」とくれば、長屋の女将さんの井戸端会議、そこにハチ公やクマさんがからんだ「かけあい」さながらに、とんとこむつかしい社会保障のなかみをスパッと絵解きしてくれる。年金から医療、失業、介護、労働災害から、社会保障制度と連動する消費税、最低賃金制、雇用対策、退職金問題、はては憲法にいたるまで、レパートリーの広さ、メニューの豊富さ。いったいこの人の頭の構造はどうなってるんだろう、とあきれたり、感心させられたりする。

「トミさん」とはいわずと知れた埼玉県社会保障推進協議会の副会長（前事務局長）、そして埼玉県労働組合連合会の事務局長をやっている原富悟さんである。

もともとトミさんは書いても、しゃべってもユニークで、軽妙洒脱。抜群の行動力の持主だが、その根っ子は「ヨメさんや子どもや遠くに離れて暮らす母を愛し、生活の場でふれあう様々な人を愛し、社会運動の中でともにたたかうたくさんの仲間を愛し（第１巻・はじめに―時に遅れず追い越さず―）という深い人間への愛である。彼に言わせれば「社会政策や社会保障運動はそのようなものだ。日本国憲法は、そのようなものとして象徴的だ」となる。

「饅頭屋さんに強盗が入った。……“カネを出せ”。加えて“腹が減った。酒が飲みたい”。そこで店員が1000円札を出し、饅頭を一箇差し出した。強盗は涙を流して感謝した。……悪人になりきれない“強盗さん”の話は何とも切ない」というプロローグから、生活保護を出さない行政的「しめつけ」（123号通知）が、多くの自治体にそんな制度があることを「知らせる」義務を放棄させた、と指摘する。

また第２巻では「フツーの働き方で過労死するような状況は病人を増やし給付が増える。過労死するほど働いているのに賃金が下がり、失業者も増加しているから社会保険の財源（収入）は細る。訓練されない素人でも泥棒で稼ぐ方が“実入りがいい”ような社会状況が……社会保障制度を掘り崩している」と言う。

全２冊の「トミさん談義」は、わかりやすいだけでなく、しっかり図表を載せ、職場や地域でのケンカの仕方（要求獲得のマニュアル）まで教えてくれている。専門家から素人までぜひ読んでほしい力作である。

（埼玉県社会保障推進協議会・2003年７月刊・各500円）

（くもん　てるお・会員・年金実務センター代表）